20 ボケた同士ウマが合う

「山本さん、出かけましょう」。「はい、出かけましょう」と山本さん。外出となると、両手でエリを直す仕草は、旅館のおかみさんだった名残です。山本さん（仮名）は重度のぼけで表情に濃いかげりはあるが、物腰は極めてていねいです。今日は訪問介護の日です。

任運荘は昭和五十六年から月二回程度の在宅訪問を始めました。前節でその一例を報告しましたが、平成元年末現在で延べ百二十四世帯を訪問し、受けた相談総数は延べ三百二十七件。その内訳は、話し相手七十二件△入浴五十二件△床ずれ五十件△ぼけ四十件△一時預かり三十件――の順です。

全国的にも特養ホームが訪問介護をしているのは少ないが、極めて効果的な仕事です。任運荘の仕方は次の二点で他と違っています。第一に訪問はすべて

先方の依頼に応じて行なう。第二にホームのお年寄りが交代でチームに参加する。

さて、今日のようにぼけ相談の家庭を訪問する時には、よく山本さんが加わります。山本さんがよい役割を果たしてくれるからです。先方にも山本さんのことは通じてありますが、礼儀正しいのでその面影を全く感じさせません。

先方のぼけの方と山本さんは同じ話をのんびり幾度も繰り返しています。

先方　息子や嫁がぼけたとバカにして、二階にカギをかけて入れる。おむつをはずすと、もう死ねという……。

山本　あなたもですか。私もよく叱（しか）られました。血のつながった親子だから言いたいことが言えるんです。でも、息子と一緒に暮らせるうちがはなです……。

ホームにいる時とは全く別人のようです。先方の家の人からも頼まれます。「あなたと話していると、うちの母はまともです。こんなだと、何もカギをかけなくてもいいんです。時々、話し相手に来て下さい」。ぼけた者同士が一番

午後のひととき――Aさんはタクトを取ってご機嫌になりました。

ウマが合う、と山本さんは教えているといえます。

しかし、悲しいかな、山本さんは一カ所に三十分と落ち着けない。「おいとまいたしましょう」と、しきりに私たちを促します。何もかも忘れ果てて帰りたいだけです。しかし、帰るあてはないのです。

だから、ホームにいても昼夜の別なく徘徊（はいかい）の明け暮れです。満たされることのない帰郷の心を追い求めて。

寮母室には、いつもジュースや果物が用意されています。山本さんが帰り

たいと訴え出ると、「このジュース、息子さんからお母さんへ、と送って来たのよ。これ飲んで明日、お迎えを待ちましょう」。受け取りながら「あの子、とってん優しいんで」と目を細め、しばらくは落ち着きます。

毎日が山本さんに合わせたウソの繰り返しです。たまに「息子からの贈り物はまだ来ていないでしょうか」と、うれしい問いかけ。「あっ、今、着いたばかりですよ。息子さん親孝子ですね」。

ここで山本さんからの教訓が二つ。一つ、ぼけの人が気にかけている身内をいつもほめてあげよ。二つ、その人にあわせた作り話を心を込めて工夫せよ。

ムダと分かっていても、山本さんの一時の満足にもなれば、と一緒に家に帰ります。悲しいかな、三十分もたたぬうちに「家に帰りましょう」。そばに最愛の息子がいる、というのに。ああ、帰りつくべき家がどこかに消えたのです。山本さんと一緒に泣きたくなります。

今宵も寮母の目をくぐり、玄関を抜け、やっと門前にたどり着く。しかし、そこで立ち尽くす。わが家の方角が分からないのです。暮れなずむ中を、たた

ずみ続ける、いとも小さな後ろ姿は、悲しさの象徴です。

それから数年、九十を過ぎた今、衰えは急速で病床に臥しがちの身となり、妄想に苦しみ続けた表情もなごんでいます。天の配剤ともいうべき中を、しかし、今も家路への夢を追い続けているのでしょうか。